

「国際ニュースの読み方と インテリジェンス的情報術」

構成

第1部 インテリジェンス（情報分析）の手法

第2部 国際ニュースの読み方

黒井文太郎（軍事ジャーナリスト）

第1部 インテリジェンス（情報分析）の手法

インテリジェンスとは何か？

インフォメーションとインテリジェンス

インテリジェンスは国家、企業、個人すべての活動に存在する

参考資料：

「戦略インテリジェンス論」シャーマン・ケント（エール大学歴史学部教授/元 CIA 分析官）著 2016年 原書房（※元書は1949年刊行）

「インテリジェンス 機密から政策へ」マーク・ローエンタール（元 CIA 長官補/分析担当）2012年 慶應大学出版会

インテリジェンスのメインは地味な分析

「シルバーブリット」は実際にはほとんどない

インテリジェンスの目的＝「利益」を得る

▽リアルタイム性が重要。時期を逸すれば意味がなくなる

▽次の選択のため。予測が重要

▽国家だけでなく、企業も個人も同じ

▽ただ情報を集めるのではなく、必要な情報を検討し、能動的に「取りに行く」

→何が必要かの見極めが重要

原則1 エビデンス（証拠）で事実が証明されることはきわめて少ない

シークレットとミステリー

原則2 どんな仮説でもそれを裏付ける情報は存在する

チェリーピッキングと陰謀論

陰謀論の見分け方の例→根拠が「誰が得をしているか？」の憶測のみ
認知バイアスの自覚（思い込みを排除するには）
アンカリング（一部の関連情報に引きずられる）
確証バイアス（チェリーピッキングもこれ）
→いったん確証したことを容易に変えられない。新たな情報に対応できない。

原則3 正解はない。可能性の低い仮説を排除

原則4 情報更新に対応して、考えはどんどんブレるべし

利益を得るために、より確度の高いリアルを追求する→可能性の高い仮説を選択
国家安全保障でのインテリジェンスの主目的は「リアルな脅威に対処するため」
→そのために必要なのは「リアルな脅威を知ること」

ニュースを読む情報リテラシー

「インテリジェンス」と「ジャーナリズム」と「国際関係論・地域研究」の違い
ジャーナリズムは事実の発掘・伝達。分析解説
国際関係論などのアカデミズムは精緻なセオリー化
インテリジェンスは事実の伝達だけでは意味がない
(インテリジェンスは、適切なタイミングで役に立つ情報でないと意味がない)
※どれが優れているとかではない。

原則5 ショートカット（認知バイアス）も、ときに有効（ただし自覚が重要）

自身の経験・見聞にバイアスの自覚

エビデンスがなくとも「ファクト」（事実）の重要性

ニュース報道にしばしばみられるファクト軽視
ファクトから仮説を導く

原則6 ファクトが否定すれば仮説は否定される

ニュース報道から、ファクトに基づかない仮説を消去法で排除する

原則7 自分の分析・判断を常に疑え

第2部 国際ニュースの読み方

現代の国際紛争

実際に戦闘が行われている紛争

▽激戦地

パレスチナ、ウクライナ、ミャンマー

▽戦闘発生中

シリア、イエメン

▽準戦闘発生地・テロ多発

イラク、リビア、南スーダン、アフガニスタン、中央アフリカ、マリ、ナイジェリア、ソマリア、

実際の戦闘は起きていない脅威

▽潜在的脅威

北朝鮮、南シナ海、イラン

その他

▽政情不安・治安崩壊

ベネズエラ、メキシコ

▽イスラム過激派テロの現状と傾向

IS(イスラム国)

アルカイダ

HTS(シャーム解放機構)

ヒズボラ、ハマス、イスラム聖戦

ガザ紛争の読み方

どの陣営からも情報の誘導が多い

▽病院攻撃をめぐる論争 ▽UNRWAをめぐる論争

情報源の見方

① どちらか陣営か？ ②現地事情に詳しい情報源か？ ③陰謀論系に近いか否か？

ウクライナ戦争の読み方

ロシアのナラティブ

(自分に都合よく事実を捻じ曲げたストーリー。事実が否かに関係なく、自分たちの陣営でのみ通用する)

ロシアのディスインフォメーション(偽情報)工作→ロシア政府筋の発進情報は嘘だらけ

※反政府派情報源のクレムリン情報も誤報だらけ

→プーチン重病説

情報源の確度とは？

▽テレグラムのアカウント(SVR 将軍・他)

▽ウクライナ側の情報

▽イギリス国防省情報

▽戦争研究所

▽英米タブロイド系メディア

▽正統派メディア

ウクライナ戦争に限り、米国情報が比較的確度が高い理由

まとめ 国際ニュースの読み方

フェイクニュース対策

①キャッチーな1社スクープは保留

②飛ばしメディアは保留

→オーストラリア、インド、東欧のメディア

③YouTube に注意

「ニュースを盲信しない」の罫

キーワードでニュース検索がおすすめ